

空



2015・12

SORA 64号

霜の花

柴田 佐知子

遠目して遠出せぬ母昼の虫

一羽づつ見れば憎めぬ稲雀

秋風や古墳を測りつつ暴く

露の夜を水晶玉は映すのみ

墓穴に入る亡帝に仕へむと

鶺鴒や古墳につづく雑木山

神鏡のうしろに廻る穴惑ひ

能管の肘の高さに秋来る

秋草を隔てて牛の大きな目

どんぐりごと洗はれてゐる子供服

母にやや馴れし雀や梅もどき

女みな去りたるあとの忘年会

庭に立つ母を支へて月仰ぐ

早起きの母に見事な霜の花

福岡 高倉 和子

泡をふく水の濁りや蓮の花

稲雀翔ちて波打つ田となりぬ

豊の秋がたんごとんと電車つく

稲刈つて色失ひし大地かな

秋の蛇水の光の中に消ゆ

痛み無き父の寝顔や昼の月

病室に定席ありて秋深し

研ぎ上げし鎌に秋気や父逝けり

東京 中田みなみ

ゆく雁を追うて発車の白手套

白樺の点在紅葉濃くしたり

空家札下げてもみたき啄木鳥の穴

窓枠に嵌めて繪となる秋の牧

朴落葉踏む音つづく美術館

シャガールの溶けさうな繪や壁暖炉

雲の裏かがやき大根抜き終へし

冬ざれや省くものなき森の堂

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

喪の奏を了ふや刈田の濃き匂

風入れや地獄極楽図の真つ赤

秋祭裏の暗がり歩きをり

新酒酌むただそれだけの差し向かひ

種茄子に一と日かぶさる怒濤音

魂遊ぶ網ほほづきとなる日まで

かりがねや思ひ返せばすべて些事

やや寒の身を地下鉄に湯島根津

夜は夜の炎を上げて鶏頭花

秋日積むインクラインの枕木に

秋蝶も我も吹かるる身なりけり

山の田に鬼も落穂を拾ふころ

臥す姉へ一と夜で縫ひし菊枕

煎餅の包み十字に秋の暮

秋すだれ夜は波音のみ容れて

姫もなか手にあれこれと老菊師

福岡 柴田志津子

目印は百日紅の揺るる角

焼栗の匂ひの中に露店の灯

唐津街道さらにせばめて椋鳥渡る

不意の客裏の茸でもてなせり

運動会わが子のほかは見てをらず

鶴守りの便り一片鶴来しと

鉄塔の列が入りゆく紅葉山

夫逝きて木椅子がひとつ星月夜

福岡 岸 洋子

見上げたる橋も渡りて紅葉狩

猫が猫誘ひに来たり冬あたたか

どんぐりを掃くころがしてころがして

母の忌を明日に大きな後の月

海峡を眠りて渡る神の留守

つかず離れずとは浮寝鳥のこと

納骨をすませ寒さのつりけり

息白く喪の一族の端に居り

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

水神の岩ひりひりと喜雨を待つ

駅頭に天守展くる秋の晴

箱膳をはみ出してゐる鮎の串

鯨の空晴れわたる松手入

鮎を焼く火を落したる瀬音かな

あれは鳶あれは山鳥城の秋

秋闌けて鮎の香淡くなりにつけり

鯖雲のあつまつてゐる城下町

青竹の色を忘れし崩れ籜

目印に天守閣あり秋の蛇

暮れがたの早瀬ひびけり鮎の宿

城門へ斧振りかぶるいぼむしり

天領の青き夕空芦を刈る

鬼やんまざら紙の音立てにつけり

白露や伏せて鵜舟に舳先なし

みづうみと芒の原と光り合ふ

福岡 矢野百合子

澄む秋や白鷺首を入るる空

満月や引き込み線に眠る貨車

いくたびも曲りて訪へり盆の家

放生会鯉放たれて輪に帯に

面の中もひよつとこ顔となり踊る

粕屋 吉田 菫

外輪山ちぎれしままに紅葉せり

名月や砂洲の結びし陸と島

軍神の集まつてゐる菊花展

神官は稚児の歩幅に秋祭

新藁の粉舞ひ上がるかくれんぼ

大宰府 山本 則男

編笠の中は浄土や風の盆

踊り子の闇より出づる風の盆

羽二重のかかし踊りや風の盆

町中が風になりゆく風の盆

秋風や石の瘦せゆく秋吉台

粕屋 秋 千 晴

鶏小屋の鶏ごと流る秋出水

実家にはいつもの和菓子秋彼岸

秋刀魚焼く煙の中に火の混じる

秋深し能楽堂の黒光り

手のひらの裏も表も歳つまる

糸田 宮井 知英

金目鯛潮まみれの眼を並べ

手の届きさうな町の灯石路の花

規律なき雑兵の如枯蓮

裏山へ口を開けたる鼬罌

何もせぬ何も出来ぬ日着ぶくれて

福岡 吉村 摂護

茄子の花少子化進む村は市に

出世とは縁なき衆生濁り酒

野良猫の人呼んで鳴く秋じめり

肌寒や断層しるき世代間

無為と書く夕べ勤労感謝の日

熊本 松田 明子

弟が兄に一勝宮相撲

泣きながら土俵にあがる稚児相撲

摂待に地獄絵図など見せられし

神木に手を合はせたる台風過

台風に孤独地獄の一夜かな

福岡 樋口 みのぶ

秋風や祠覗けば何も無し

湯治場へ一本道や紅葉山

クローバーの四つ葉を渡す見舞かな

紙箱に釘いろいろ毛糸編む

しぐるるや荒れて久しき裏の畑

福岡 栗原京子

晶晶と漁師の町へ姫神輿

綴りたる古き鎧や渡御の道

鬼の髪乱れて美しき神楽かな

すさまじや道掘り返す獣みて

ふりむけば雀すぐ散る方年青の実

糸島 小林朱夏

煮凝に生あるものの震へかな

水鳥の声は陰しく木霊する

男子寮屋根をはみ出し蒲団干す

椅子の脚支ふる母と注連飾る

書初に座りよき字を選びけり

福岡 田代貞枝

青空を突き刺すやうに柿を挽ぐ

柿挽げば雲の上より夫の声

熟柿落ち庭は修羅場となりにけり

置き去りの脚立と木守柿一つ

木守柿雲と話してゐるやうな

福岡 山内碧

なつかしき道幅の町一位の実

地藏堂多き町筋燕去る

家ごとに神棚のある柿の村

秋天へ登りつめたる棚田かな

仮植糸の石路動く気のなささうな

千葉 原 友 子

みな同じマツチの頭冬に入る
偏頭痛泳へてゐたる榎櫃の実
帰燕もう宇宙の塵にまぎれけり
松茸に檜葉のせんべい蒲団かな
どぶろくや熊の毛皮の座り艶

福岡 あさなが捷

魚屋の旅につり銭秋気満つ
預りし宅配便に林檎の香
クリスマス飾りの下の防犯灯
昔むかし雪しんしんと人攫ひ
新聞を切り抜く父の炬燵かな

兵庫 石川 叔子

ひと雨の過ぎし草叢ちちろ鳴く
秋澄めり牧に草食む牛の数
宮参りの嬰すやすやと菊日和
松手入れ終り香りにもてなされ
枝豆を茹で連れのなき夕餉かな

東京 山田 正子

秋の蝶僅かな風に溺れけり
悪役はいつも悪役いぼむしり
海見えぬ海浜通り赤とんぼ
雁渡し青く塗られしかもめ丸
雁渡る運河に夕陽こぼしつ